

# あいづち表現形式に見る 心内の情報処理操作について

富樫純一

## 0. 問題の所在

本稿では、会話に現れる「あいづち」に関する分析を試みる。あいづちは聞き手が話し手に働きかける手段の一つである。従来、あいづちの分析は会話という側面から、話し手に対して「聞いている」という態度を表現する、発話権を行使しない(turnの獲得を表示しない)等、話し手/聞き手の間での働きかけの在り方が中心的な観点となっていた。

しかし、表現形式という側面からあいづちを考えてみた場合、あいづち表現形式の異なりが問題となってくる。この点について詳しく踏み込んでいる研究は少ない。例えば、次の対話例を見てみる。

- (1) A 昨日ね、駅前のデパートに行ってきたんだ。  
B うん/はい/はあ。  
A それでね、……。

「うん」「はい」「はあ」はいずれもあいづちとして可能な表現形式である。これらの形式の違いはどこにあるのであろうか。どの表現形式も「あいづち」として解釈されることに問題はないが、これらの使い分けはどのような理由に基づいているのであろうか。状況によっては、いずれかの形式が発話困難な場合もあるだろう。次の対話を見てみよう。

- (2) 0011 A : その人も、  
0012 D : そ、そ、そいつも自殺、  
0013 C : 自殺、  
0014 D : 腹切って、だから、  
0015 C : 自殺幫助でほんとは捕まる。  
0016 D : うん。  
0017 A : そうそうそう。

最後の話者Dと話者Aの発話はどちらも話者Cの発話に対するあいづちである。ここで話者Dは「うん」という形式、話者Aは「そうそうそう」という形式を用いている。このようにあいづちにおいて表現形式が使い分けられる理由はどこに求められるのだろうか。

本稿の目的は、第一にあいづちという概念を再検討し、心内の情報処理的側面にその本質を求める。そして、第二に実際の会話コーパス分析により理論と実際の使用との結びつきを確認する点にある。

## 1. あいづちとは

### 1.1. 分析対象

そもそもあいづちとはどのようなものであろうか。あいづちの位置付け、機能に関してはさまざまな研究があるが、ここでは会話分析の観点からあいづちを検討しているメイナード(1993)、堀口(1997)を取り上げる。

メイナード(1993)、堀口(1997)においては、いずれも「あいづちは聞き手が用いる表現」「聞いている」ということ、およびそこから派生する何らかの態度(理解、同意、感情表出等)を話し手に対して伝える」という点では共通しているといえる。

以下、該当箇所を引用してみる。

#### (3)1. 「続けてというシグナル」(continuer)

2. 内容理解を示す表現
3. 話し手の判断を支持する表現
4. 相手の意見、考え方に賛成の意思表示をする表現
5. 感情を強く出す表現
6. 情報の追加、訂正、要求などをする表現

(メイナード(1993), p.160)

#### (4) あいづちが出現する位置は、話し手の発話権の中である

あいづちを行使するのは、聞き手である

あいづちの機能は、聞いているということを伝える、わかったということを伝える、話の進行を助けるなどである

あいづちを表す言語形式は短い

(堀口(1997), p.41)

これらの記述を見ると分かるとおり、あいづちは基本的には「発話権を行使している者」に何らかの効果を与える機能を持つと位置付けている。

もちろん、あいづちという行為に上記のような働きが見られる点に関しては問題ないといえる。しかし、これらの働きが個々の表現形式によりどう異なってくるのかという点に関しては言及がなされていない。

話し手に対し何らかの意思表示をする、という役割は話し手側の「解釈」による判断でしかないと考えられる。あいづち使用者が本当に意思表示のためだけにあいづち表現形式を用いているのだろうか。上記のような聞き手に与える「効果」に視点を据え、あいづちを記述していくのも一つの方法であるが、本稿では別の視点からのアプローチを試みる。

## 1.2. 理論的前提

本稿でのあいづちの扱いについて、そして分析を試みる上での理論的前提を提示しておく。まず、あいづちそのものの概念について考えてみる。

先行研究においては、話し手/聞き手間の interactive な側面からあいづちを位置付けようとしている。つまり、相手への態度を表現する、ということがあいづちの本質であるという考えである。

- (5) 「そしてあいづちが会話に使われる根本的な理由は、やはり会話相手に対する意識、ひいては「思いやり」という当事者間の心理的、感情的なふれあいに求めなければなるまい。」 (メイナード(1993), p.160)

このような「ふれあい」的なものはあいづちという行為には(直接的/間接的を問わず)認められるだろう。しかし、話し手/聞き手の相互「理解」や「感情」の強弱にあいづちの機能を集約させてしまうのには問題がある。あいづち表現形式の差異について直接的に言及することが困難になるのである。「うん」と「そう」の違い、「うん」と「はい」の違い等に言及できず、どれも一つのあいづち行為としてしか捉えることができない。意志・感情の表現伝達という働きは形式発言の際の「解釈」なのである。それを広い意味で「あいづち」として枠に困ったため、その中の表現形式間の差異の追究にまで至ることができなかったといえる。つまり、あいづちという行為に重点を置くか、形式そのものに重点を置くかの違いである。本稿では形式そのものに重点を置く。

「うん」や「そう」などの表現形式そのものに機能を求めていく。となると、あいづちといわゆる応答表現の違いは形式の上では無いことになる(どちらも

「うん」である)。聞き手として用いるか、話し手として用いるか、という違いしかないのである。形が一緒なのであるから、そこに何らかの共通する本質的な機能が存在すると仮定したほうがシステムティックで簡潔な機能記述に行き着くだろう。この点に関しては3.節でもう一度触れる。

本稿ではこのような立場に立ち、「あいづち」という行為ではなく、あいづちに伴う表現形式の分析を中心とする。そして、機能記述においては心内の情報処理に焦点を合わせる。

冨樫(2001)では、談話標識と呼ばれる形式を「情報処理の標示」という機能を持つものとして位置付けている。あいづち表現形式も感動詞・応答詞の類の談話標識であるので、表現形式そのものは何らかの心内の情報処理との関わりがあると考えられるのである。

- (6)「感動詞・応答詞類の談話標識を「心内での情報処理を示す」ものとして捉える立場に立つ。実際に聞き手がいる対話においても、まず話し手内部での情報処理が初期段階として存在するのである。談話標識が、表面的には対他的な伝達行為を示すとしても、その根底には必ず話し手の心内での情報処理が関わっているのである。」 (冨樫(2001), pp.20-21)

つまり、表現形式(談話標識)の本質は、発話者の心内での情報処理操作の標示であると位置付けられる。

今回の考察ではいわゆるあいづちとして用いられた「うん」と「そう」について扱う。応答表現に関しては、紙幅の都合上、詳細な用例分析は考察を行わないが、結論的には表現形式として同一であるので、そこに存在する本質的な機能は同じであると考えられる。

また、「うん」と「そう」の違いについて補足しておく。堀口(1997)では、あいづちの分析に際して、以下のような区別をしている。

- (7)「あいづちが打たれる位置という点から見ると二つに分けられる。一つは句の切れ目であればどこでも打てるあいづちで、これには「うん」「ええ」「はい」「はあ」などがある。もう一つは相手が伝えようとしている内容が分かってからでないかと打てないあいづちで、これには「ほんと」「そう」「そうですね」「そうですか」「ね」「なるほど」などがある。」 (堀口(1997), pp.61-62)

話し手の発話内容に関わらず発話可能か、内容を理解しないと用いることが

できないか、という差であると考えることができる。これはあいづちだけではなく、表現形式そのものに当てはまる差異といえる。

## 2. 分析と機能記述

### 2.1. 概念規定 心内領域と linking

あいづち表現形式の分析に当たり「linking」という概念を用いる。本節では linking について説明する。富樫(2001)では「はい」系(「はい」「うん」「はあ」)の表現形式の持つ機能として linking という概念を提示している。linking とは情報と情報とがつながっているというメタ的な情報のことである。

(8) 「「はい」系における情報とは何であろうか。独り言での使用や相づちの用法を考えてみると、いわゆる命題的な情報ではなく、情報間のつながり(linking)としての情報と考えられる。」

(富樫(2001), pp.34-35)

会話の瞬間瞬間で参加者はそれぞれひとつの情報が active になっている。その時に単に active な情報が単独で存在しているのではなく、それに関連するさまざまな情報が付随してくる。これは semiactive 領域に置かれる accessible な情報である\*1。

例えば、「太郎が学校に行く」という情報において、「太郎」に関する経験的知識、「学校」に関する経験的知識、「学校に行く」という行動に関する経験的知識など、さまざまな情報が accessible な情報として、「太郎が学校に行く」という active 領域の情報と結びついているのである。

この active 領域にある情報と accessible な情報との結びつきを link とする。linking とは、関連する accessible な情報を追加する処理操作である。

ごく単純化して言うと、ある話者Aが「学校に行く(コト)」という情報だけが active であるとする。そこに他の話者が「太郎が学校に行く」と発話すると、まずAの心内では「太郎」という情報が active になり、それとほぼ同時に「太郎」に関連する、話し手の持ついくつかの情報へと link が形成される(linking)。

---

\*1 Chafe(1987, 1994)参照。

結果として、「太郎」に関連した情報が accessible なものになる\*2。

つまり、linking とは semiactive な領域に新たに情報を加える操作である。上の例で言えば、「太郎に関連する情報(どんな人物か、所属は、立場は、等)」が accessible な情報として semiactive な領域に加えられるのである。linking された情報は会話の流れによって、active 領域に移行する(発話される)場合もあるし、そのまま semiactive 領域に留まる場合もある。

この linking という概念を用いて、あいづち表現形式である「うん」「そう」について、実際の用例を元に検討していく。

## 2.2. 資料

本稿で資料として扱うものは、五人(それぞれA、B、C、D、Eとする)の参加者による自然談話である。

特にテーマを与えず、自然な会話を記録した。書き起こした部分は主として「切腹・死刑」に関する話題で会話が展開していく部分である。

また、資料の書き起こしに当たっては、あいづち等を考慮せず、発話があった時点で改行を行った。「・・・」は一秒以上のポーズ、「？」は上昇イントネーション、「//」は次の話者の「//」部分と発話が重なっていることをそれぞれ示している。句読点に関しては、書き起こし者の判断により実際のポーズとは関係なく、意味の切れ目で記入してある。一人の発話ごとに改行しているため若干あいづちの把握が難しいところがある。以下、取り上げた用例に関してはあいづちの部分に下線を引いてある。

便宜上、話者が変わるごとに通し番号を付した。なお、番号の付いていないものはすべて作例である。

## 2.3. 検討

まず、あいづち表現形式「うん」について見てみる。

(9)0034D：切腹ぐら이었다ら、まだ、どっかでやっ取るかしんないけどさあ。介錯まです、

---

\*2 もちろん実際の処理はもっと複雑であろうし、linking されるものが一つであるとも限らない。さらに、その新たな情報は inactive 領域からコピーされる場合もあり、semiactive 領域内での優先順位が変化する場合もある。

0035 B : どっかでやってるから切腹、自殺する時とかに？

0036 D : うーん、いや、なんか、

0037 A : こないだ、だって、割腹したおっちゃんいたもんね。

0038 C : うん、うん。

0039 D : うん。いるよ。割腹だったらいる、／／と思う。

0040 A : ／／でもね、切り方悪いと6時間ぐらい死ねないらしいんだよね。

この例は話題「切腹について」の会話の一部である。0038 C、0039 Dの「うん」発話がいわゆるあいづちである。

0038 Cのあいづちでは次のような心内での処理が行われたと推測できる。「割腹した人がいた」というサブピックが直前の0037 Aにより提示される。その情報がここでのメインピックである(つまり active 領域にある)「切腹の話」との linking を形成し、その標示のために「うん」という発話が起こったのである。

Cは「うん、うん」と繰り返すことで、「割腹した人がいた」という accessible な情報の組み込みが「切腹」という話題とかなり近い位置(他の情報よりもアクセスしやすい位置)で行われたことを示すと考えられる。

これは、直後のDが一回の「うん」発話であることと比較すると分かる。Dの後の発話「いるよ。割腹だったらいる」はその情報がすでに accessible になっていたことを示している。もともと accessible な情報であれば、その組み込みにはさほど負担がかからない。この負担量の差が標示の差になって現れると考えられる。

Cの「うん、うん」とDの「うん」とでは、情報処理に若干の差があることが予想されるのである。もちろん、処理操作の違いが現れているのではなく、あいづち使用者のなんらかの強調的な態度を示している可能性も考えられる。処理操作と態度の扱いについては3.節で触れる。

それでは次の例を見てみよう。

(10)0274 E : 電気とか、

0275 B : 薬。

0276 E : 注射とか。

0277 D : ／／うん。

0278 C : ／／うん。

0279 E : 電気椅子とか。

0280 D : だから、アメリカは、あれ、州によっては死刑は / / 禁止んともあるでしょ。

0281 C : / / ないともあるし。

0277 D、0278 C の「うん」によるあいづちは、「死刑の方法」というトピックに関して、「電気」「薬」「注射」という情報が提示されたのを受けての発話である。

この場合、D と C が情報を組み込んだという明確な証拠はない。が、「死刑の方法」に関して、ある程度情報が提示された時点で、二人ともタイミングよくほぼ同時に発話している点を考えると、linking 処理の時間的側面が伺えるかもしれない。

もちろん D、C ともに 0280、0281 で発話を行っている。linking によって accessible な情報の量が増えたことで、発話のきっかけが得られたといえる。

(11)0319 A : 大体だってあの、・ ・ 警察制度がすごいじゃん、ややこしいじゃん。

0320 D : うーん、うんうん。

0321 A : ね、F B I なんてのはほら、国家レベルでやってるけど。

0322 B : うんうん。なんか敵対してますよね、 / / ドラマとか見てると。

0323 A : / / そうそう。

0324 D : そうそうそうそう。

0325 A : だから、日本だとどう頑張っても警視庁と、 / / なんかその、なんとか警察署の戦いで、

0322 B の「うんうん」という発話は、0319 A、0321 A の「警察制度が複雑で組織が複数ある」という内容の発話を受けて、その情報を semiactive な領域に組み込んでいる、つまり linking を行った標示である。

さらに 0322 B の発話を見ると、accessible な情報として組み込まれた「組織が複数ある」という情報から、さらに「敵対している」という情報にまで結びついている。その意味では、B の「うんうん」という発話は自身の情報の active 化を中継する役割を担っているとも考えられ、非 active な領域から active な領域へ情報が移動する(書き込まれる)という一連の情報処理の流れの中で、「うん」がその中間に位置する semiactive 領域で行われる処理を標示する機能を持

つことの証左になると思われる。

特に、「うんうん」といった繰り返しの表現形式には、その背後にある linking 処理をより明確に標示していると考えられる。

この会話にはさらに「そう」というあいづち表現形式が現れる。「うん」と「そう」の異なりはどこにあるのであろうか。次は「そう」について分析してみる。

(12)0086 D : やっぱり磔とか打ち首とかのほうがはるかに罪は重いんですよ。

0087 B : うん。

0088 A : 要するにその、否応なく奪われてしまうのと、自分の意志で死を選ばされるんだと、

0089 E : うんうんうん。

0090 D : そうそうそうそう。

0091 A : その一、武士の死に方で最悪なのはほんと打ち首で、

「そう」については堀口(1997)でも指摘されているように、発話の内容を理解しないと用いることができない。これは用例においても内省においても正しいといえる。しかし、(12)での0089 Eのあいづち表現形式「うん」と0090 Dのあいづち表現形式「そう」はどちらも発話内容を理解した上での使用であると考えられる。となると「そう」の発話基準として発話内容の理解というポイントを設けるのは不適切であると思われる。

「そう」という指示の特性を考えると、「そう」によるあいづちは、linkingの再確認といえる。つまり、他の話者によってもたらされた情報が話し手の心内において既に link を形成していることの確認標示なのである。このように位置付けると「うん」と「そう」の違いを明確にすることが可能となる。「うん」は新たな linking の標示、「そう」は既存の linking の確認標示となり、どちらも linking に関わっているが、その処理方法が異なっているのである。

よりメタ的な視点で見ると、「そう」発話の背後では、linking 確認による再度の linking 形成処理が行われているとも考えられる。「そう」はある意味 linking そのものへの指示といえるだろう<sup>\*3</sup>。

次の例を見てみる。

---

\*3 指示表現の持つ機能との関係については今後の課題である。

(13)0349 D : / / 日本みたいに 100ヶ条もないんだよ。

0350 B : / / 基本的なものだけ。

0351 A : . . . なんだっけ、その、あそこは、その、慣習法的に全体のは出来てて、

0352 D : うんうん、そうそう。

0353 A : 細かい規定は州法が、

0354 D : そうそうそうそう。

0355 A : やってるかな。その、精神ぐらいしか定めてないぞ、っていう、

ここでは興味深い現象が確認できる。0352 Dのあいづちでは「うんうん、そうそう」という発話順序になっている。今回の使用コーパスでは、逆の順序である「そう(そう)、うん(うん)」という順序での発話は全く見られなかった。作例してみれば分かるが、「そう(そう)、うん(うん)」という発話順序はかなり違和感がある。

(14) A あそこは、慣習法的に全体のは出来てて、

D ?そうそう、うんうん。

特殊な状況を設定しない限り、「うん そう」の順序が基本だといえる。つまり、あいづち表現形式とはいってもその本質には差があるということである。

ここから分かるのは、「そう」が「うん」とは異なり、単なる accessible な情報の linking の標示をしているのではなく、既に形成されている link との比較といったような複雑な処理の標示と考えられる。

また、0354 Dのように「そうそう」は、相手の発話がまとまりをなしているか否かに関わらず発話が可能である。これは、「そう」が複雑な計算処理をしているためであり、参加者に対して発話のタイミングを考慮できないほどの計算が心内で生じていることの傍証となるのである。その意味では、「そう」が発話内容を理解した時点でないと使用できない、とする先行研究への反証ともなりうるものである。

(15)0070 C : 実際の致命傷はこっちなんですよ。

0071 D : うん。

0072 B : ふーん。

0073 A : こういって、ま、震えて、 / / いけないと、こうやって当てたまま倒れ込むとかね。

0074 D : / / うん。 そうそうそうそう。

0074 D のあいづちも「うん そう」という発話順序になっている。これまでの例もそうであるが、あいづち表現形式が繰り返される場合には、linking がより積極的に行われていると考えられる。同じ話者による 0071 D のあいづちと比較してみると分かるだろう<sup>\*4</sup>。

「うん」「そう」以外のあいづち表現形式も同様の議論が可能となると思われる。

(16)0123 D : じゃなくって？

0124 B : 竹で。だから、よ、竹って切れないですよ、よく。

0125 D : あーあーあー。

(17)0218 A : いや、一生幽閉じゃなかったっけ？ ・ ・ ・ いないこと、戸籍上存在しなくなっちゃうから。

0219 C : はあはあはあ。

0220 D : あ、そうかそうか。

0221 C : そうかそうか。

詳細については今後の課題となるが、あいづち表現形式を繰り返すことが、いわゆるあいづち的な役割を果たすのではなく、本稿で言うところの情報処理操作の標示機能をより顕著に表していることを指摘することができるのではないだろうか。

### 3. 「あいづち」という解釈

ここまで、あいづち表現形式の機能を考察してきたが、それぞれの表現が確実に情報処理の標示としての機能を果たしているのか、という点に関しては疑問が残るだろう。

先行研究で述べられたように、「あいづち」という行為には基本的に「内容理解の標示」「turn の継続をうながす」といった働き(機能)があるとされてきた(1.節参照)。事実、コーパス内の用例においてもあいづちの基本的な働き

---

\*4 しかし、実際には単独でのあいづち「そう」の発話はあまり見られない。「そうそう」等のように繰り返される形式がほとんどである。

しか見出されないものもある。

(18)0083 A : 死刑、死刑よりはましなんですよ。

0084 B : うん。

0085 C : うん。

0086 D : やっぱり磔とか打ち首とかのほうはるかに罪は重いんですよ。

0087 B : うん。

しかし、それはあいづちという行為を受け取る側の解釈である。(18)に現れる「うん」には linking の標示という機能を積極的に見出しにくい。いわゆる典型的なあいづちである。が、だからといって、あいづち表現形式において「内容理解の標示」というような参加者に向かう働きを基本的な機能として設定できることにはならない。

あいづち表現形式といわゆる応答表現との明確な区別が困難だからである。あいづちと応答表現との区別が恣意的になりやすいのは先行研究でも指摘されているとおりである(だからこそ正確なあいづちの定義がなされていない)。これは本来、あいづちと応答表現の区別はなく、表現形式としては同一であるからである。

あいづちに見られる役割(内容理解標示等)は個々の表現形式ではなく、表現形式の使用行為に結びついているといえる。個々の表現形式そのものに付随する「機能」ではないのである。

あいづちの場合、たまたま turn の交代が起こらなかった(その意志がなかった)だけで、その形式の背後にある心的な操作に視点を向けると、linking 標示という点では同じなのではないだろうか。この考えに基づくと、「あいづち」という行為と表現形式とに本質的な機能としての結びつきを設定する必要はないことになる。「あいづちはこういう形式」「こういう形式はあいづちの働きを持つ」というアプローチは、少なくともあいづち表現形式の本質的機能を検討していく上ではかなり迂回的であると言わざるをえない。

とはいえ、あいづちという行為そのものは厳然として存在する。心内の情報処理システムと相手への表現・伝達、これをどのように扱えばよいのか。

この解決のためには、いわゆる本質的機能と語用論的效果を分離することがもっとも得策だと思われる。

本稿で見てきたような、心内の情報処理を標示する機能を持つ表現形式が発

話された場合、必ずしも常にその背後で何らかの情報処理が行われているわけではないと考えることができる。以下、定延・田窪(1995)から引用する。

(19)「...話し手は、「ええと」や「あの(ー)」を使いながら、実際に演算領域確保や言語編集をおこなっているとは必ずしも限らない。話し手がおこなっているのは、あくまでそうした態度の「表出」にすぎないからである」  
(定延・田窪(1995), p.87)

このような談話標識を使用するに当たって、情報処理操作という態度の「表出」のみを示す場合があり、実際には処理をしていないが、そのような態度を示すことで会話の円滑な進行を促す働きも持つ。定延・田窪(1995)ではこれを「態度の表出」と呼んでいる。これはあいづち表現形式においても当てはまるであろう。心内での情報処理と聞き手が受け取る解釈をレベルの異なるものとして分離するのである。

つまり、あいづち表現形式に関して言えば、「相手の情報を正しく組み込んでいる」という態度を示すことで(実際に処理をしてるかいらないかどうかに関わらず)、あいづちを受け取る側には「正確に聞いてくれている」という解釈ができるのである<sup>\*5</sup>。

そしてこれを使用者の側から捉えると、解釈のみを的確に行わせる(特に情報処理の表明は行わない)ためにあいづち表現形式を用いることが可能となるのである。「うん」や「そう」による情報処理の態度を会話参加者に表出することで、「あいづち」行為という解釈が生じ、円滑なコミュニケーションを進行することができるのである。その意味では、実際の発話において、表現形式と情報処理操作が直接的に結びついているとはいえない。

(20)0067 D : だから、あのー、こ、普通、なん、なんだっけ、切ってそのあと頸動脈プシュってやったらさ、

0068 B : うん。

0069 D : すぐ、こう、終わりにしちゃうっていう形、

0070 C : 実際の致命傷はこっちなんですよ。

0071 D : うん。

0072 B : ふーん。

---

\*5 定延・田窪(1995)、富樫(2001)参照。

上のような例に見られるあいづち表現形式は、処理操作標示に焦点を当てた捉え方も可能であるし、参与者に対する働きかけに焦点を当てた捉え方も可能なのである。本稿での位置付けは処理操作標示が本質的機能であり、参与者への働きかけは語用論的效果であり、二つのレベルは異なっているのである。冨樫(2001)ではこのような「機能と効果の分離」を「語用論的フィードバック」と呼んだ。

(21)「語用論的フィードバックとは、標識の本来の機能を潜在化させ、語用論的效果が顕在化した状態である。そして、語用論的效果のみを会話参与者に伝達するために、本質的な機能とは関わりがないままに談話標識を用いるのである。」  
(冨樫(2001), p.39)

まさに、ある表現形式(ここでは「うん」や「そう」)が「あいづち」となるのは語用論的フィードバックによる効果なのであるといえる。そこには常に潜在的に情報処理操作が存在し、その本質的機能と、「あいづち」として解釈される語用論的效果、この二つが重なり合っているのである<sup>\*6</sup>。

#### 4. おわりに

あいづち発話が本質的な機能を優先しているのか、語用論的な効果を優先しているのかを、明確に判断することは非常に困難である。もっとも、これは会話分析に限ったことではなく談話標識すべてに当てはまる。

しかし、あいづち表現形式の本質的な機能を心内の情報処理標示という点に求めることで、形式間の異なりをシステムティックに記述することが可能となる。さらには、「あいづち」の位置付けも、語用論的效果(解釈)として明確にすることができる。従来の研究で的確に示されなかった「あいづちという行為」の概念がはっきり見えてくるのではないだろうか。

本稿での会話分析においては「繰り返し」や発話順序を手がかりとし、情報処理操作としての妥当性を追究したが、それ以外のファクターを見る必要も当然ある。より精密なポーズ、イントネーションの測定・記述、あるいは参与者

---

\*6 同一の表現形式が、策動文(森山(1989))に対する反応である場合、応答として「解釈」され、それ以外の文末、句末、文中での反応である場合、あいづちとして「解釈」される、という考え方も成り立つのではないだろうか。

へのアンケート等、あらゆる側面からの分析的アプローチは必須である。これらは今後の分析、機能記述に向かったの大きな課題である。

## 参考文献

- Chafe, Wallace L.(1987) Cognitive constraints on information flow. *Coherence and grounding indiscourse*, ed. by R. Tomlin, John Benjamins Publishing Company.
- Chafe, Wallace L.(1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. The University of Chicago Press.
- 堀口純子(1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 金水敏・田窪行則(1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展3』日本認知科学会編：講談社
- メイナード、泉子・K(1993) 『会話分析』くろしお出版
- メイナード、泉子・K(1997) 『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 森山卓郎(1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学文学部 日本学科(言語系)
- Sacks, Harvey., Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail(1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50.
- 定延利之(2000) 『認知言語論』大修館書店
- 定延利之・田窪行則(1995) 「談話における心的操作モニター機構 心的操作標識「ええと」「あの一」」『言語研究』No.108
- 田窪行則(1990a) 「対話における知識管理について 対話モデルからみた日本語の特性」『アジアの諸言語と一般言語学』崎山・佐藤編：三省堂
- 田窪行則(1990b) 「対話における聞き手領域の役割について 三人称代名詞の使用規則からみた日中英各語の対話構造の比較」『認知科学の発展3』日本認知科学会編：講談社
- 田窪行則(1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学 その提言と建設』三省堂
- 田窪行則(1995) 「音声対話の言語学的モデル 談話管理標識としての感動詞」『情報処理』Vol.36, No.11
- 田窪行則・金水敏(1996) 「複数の心的領域における談話管理」『認知科学』Vol.3, No.3
- 田窪行則・金水敏(1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編：くろしお出版
- Takubo, Y. and S. Kinsui(1997) Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of pragmatics* 28.
- 富樫純一(2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6 筑波大学文芸・言語研究科